

イスラームからつなぐ [全8巻]

[編集代表]黒木英充

[編集委員]後藤絵美・長岡慎介・野田 仁・近藤信彰・山根 聰・石井正子・熊倉和歌子

A5判・上製・各巻平均300頁／各巻税込4,180～5,500円【予価】 2023年3月刊行開始

1 イスラーム信頼学へのいざない

黒木英充・後藤絵美[編]

2 貨幣・所有・市場のモビリティ

長岡慎介[編]

3 翻訳される信頼

野田 仁[編]

4 移民・難民のコネクティビティ

黒木英充[編]

5 権力とネットワーク

近藤信彰[編]

6 思想と戦略

山根 聰[編]

7 紛争地域における信頼のゆくえ

石井正子[編]

8 デジタル人文学が映し出す名士たち

熊倉和歌子[編]

深刻化する現代世界の
分断状況を解決するため



Islamic Trust Studies
イスラーム信頼学

シリーズ刊行によせて

第一次世界大戦とその後の国際秩序模索の時代から100年が過ぎた。この1世紀の間に、第二次世界大戦と40年余りの冷戦を経て、脱植民地化が進み、ソ連崩壊によるアメリカ一極支配体制が出現し、人類はようやく安定した平和の時代を手に入れた、と見えた瞬間があった。

しかしそれが錯覚であったとすぐに明らかになる。世界人口の約6割を占める一神教徒にとっての聖地が集中するパレスチナでは、アメリカなど西側諸国の後押しを受けた、イスラエルによる植民地化の暴力が止まらない。多民族国家ユーゴスラビアでは内戦が始まり、強制追放と虐殺が相次いで四分五裂した。冷戦期にアフガニスタンにて対ソ連戦の道具として西側に利用された「自由の戦士」たちは、その後「テロリスト」として9・11事件を起こしたとされる。アメリカが「大量破壊兵器疑惑」をでっちあげて起こしたイラク戦争は、イラク国家機構の完膚なき破壊と甚大な人命損失を招き、10年ほどしてシリア内戦に連動して「イスラム国(IS/ISIS)」を生み出した。

これらはイスラームが何らかの形で絡んだ顕著な事件の一部でしかない。イスラームといえば、常に他者との対立・紛争を想起する人が多いのも無理はない。世界の移民・難民におけるムスリムの割合は非常に高く、排除と分断の動きは深刻さを増している。冷戦終結後最大の危機とされるウクライナ戦争も、この100年続いてきた排除と分断の大きな流れの中に位置づけられ、さらなる古層にはこの地域を支配したムスリム政権の記憶が横たわる。

より一般化した見方をするならば、国民の同質性を国家の前提に掲げつつ、他方で人口の多数派・少数派を意識し、敵を指定して立ち向かうのを「文明化の使命」により正当化する——過去1世紀を通じて、こうした動きが世界各地で進んできたのである。それは私たちの身の周りでもふとした折に顔を出し、ひとたびインターネット空間に立ち入れば、その野放図な拡がりをさまざまと目にすることになる。

もちろん、この間に数多の国際組織が形成され、グローバルなサプライチェーンは緊密度を増し、コミュニケーション手段は驚異的な発達を遂げ、国境を越えた人々の交流が深まった。人類文化の多様性が強調されて、多文化主義が政策化される局面も現れてきた。しかし、こうした動きが排除と分断の動きに抗しきれぬまま押し流されようとしているのを認めざるをえない。

本シリーズは、広い意味での「イスラーム」に関わる研究者が、「つながり」(コネクティビティ)と「信頼」をキーワードにしつつ、1400年間(2022年はイスラーム暦元年622年から太陽暦計算でちょうどこの節目であった)にわたるイスラームの拡がりの歴史と現在のなかに、排除と分断に対抗する知を見つけ出そうとするものである。ただし、イスラームの教義から出発して演繹的考察を深め、イスラーム文明の独自性を結晶化させる、という方法はとらない。逆に、研究者が取り組んできた過去と現在のイスラームをめぐる多様な時空間から、学知のみならず、暗黙知として認識してきたような「つながりづくり」の知恵と術を抽出しようとする。そしてそれを排除と分断をのりこえるための戦略知として鍛え上げることを目指すものである。

もちろん、現在20億ともいわれる人口規模をもつムスリムもまた、排除と分断を経験し、苦しんでいる。しかし長い目で見れば、イスラーム文明はこれまで多様な集団や文化を包摂してきたのであり、「つながりづくり」と信頼構築のための知恵と術の宝庫でもある。本シリーズを通じて、その戦略知を様々な形で伝えたいたいと思う。「イスラームからつなぐ」という言葉にはそうした願いが込められている。

本シリーズを生み出す母体となるプロジェクトは、文部科学省科学研究費・学術変革領域研究(A)「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築：世界の分断をのりこえる戦略知の創造」(2020-2024年度)、略称「イスラーム信頼学」である。本シリーズが、読者にとって新たな「つながりづくり」のために役立つ手がかりとなることを願っている。

イスラームからつなぐ 【全8巻】

各巻構成

イスラームからつなぐ1

イスラーム信頼学へのいざない

黒木英充・後藤絵美[編]

「イスラーム的コネクティビティに基づいた信頼構築」とはいかなるものなのかな。「つながり」をキーワードに、イスラーム文明の歴史と今日の世界における意味をとらえ直すための視座を提示する。シリーズ全8巻を俯瞰し、プロジェクトの全体像を総合的に示す。

【目次】

序 章 イスラームから考える「つながりづくり」と「信頼」——今後の世界を見通す鍵として(黒木英充/東京外国語大学、北海道大学)

第1章 濱戸内から世界に広がるつながり——ある日本人ムスリムの足跡をたどる(岡井宏文/京都産業大学)

essay 1 他者を理解するために必要なこと——幕末の「日本人」のイスラーム経験から(黒田賢治/国立民族学博物館)

第2章 多様なひとびとをつなぐ翻訳——イスラームの各地への展開と知の伝達(野田仁/東京外国語大学)

第3章 異なることばをつなぐ言語——インド洋世界におけるウルドゥー語の役割(須永恵美子/東京大学)

第4章 未来をひらくイスラーム経済のつなぐ力——その思想と歴史から学ぶ(長岡慎介/京都大学)

第5章 イスラームで国をつくる——宗教・国家・共同体(近藤信彰/東京外国語大学)

essay 2 宗教がひしめきあう都市で人がつながる——18世紀イスタンブルの公衆浴場から(守田まどか/東京外国語大学)

第6章 不信から生まれる信頼?——モロッコ、ベルベル人の「寛容」を中心に(池田昭光/明治学院大学)

essay 3 信頼と不信が垣間見えるとき——シリアで見聞きしたこと(黒木英充)

第7章 信頼のためのイスラーム思想と戦略——現代南アジアにおける政治運動の正当化(山根聰/大阪大学)

essay 4 中東で政治的な信頼をはかる——イラクでの世論調査から考える(山尾大/九州大学)

第8章 神の教えの実践とヴェール——信頼から信仰を読み解く(後藤絵美/東京外国語大学)

第9章 「テロリスト」に対する軍事的解決と信頼のゆくえ——フィリピンからの問い合わせ(石井正子/立教大学)

第10章 見えないつながりを描き出す——デジタル人文学の可能性(熊倉和歌子/東京外国語大学)

essay 5 保育園で「つながり」を考えてみた——双方向的探究から広がる新しい世界(太田(塙田)絵里奈/東京外国語大学)

付 錄 ブックリストとサイト案内(荒井悠太/京都大学)

イスラームからつなぐ2

貨幣・所有・市場のモビリティ

長岡慎介[編]

イスラーム世界における経済制度、いわゆるイスラーム経済は、資本主義が抱えるさまざまな課題を解決しうる戦略知として大きな注目を集め始めている。イスラーム経済がもつ驚異的なコネクティビティと柔軟性に着目し、そのポスト資本主義的可能性を、他地域・他時代との比較も織り交ぜながら探究する。

【目次】

総 論 経済制度のモビリティとイスラーム——その独自性と普遍性(長岡慎介/京都大学)

第I部 貨幣のコネクティビティ

第1章 なにが貨幣を生み出すのか——前近代イスラーム社会における貨幣発行と貨幣経済(亀谷学/弘前大学)

第2章 市場とコミュニティをつなぐ貨幣——アフリカと沖縄における贈与経済のダイナミズム(平野美佐/京都大学)

第3章 利子に抗する貨幣思想/システムの系譜学——古代ギリシャ哲学から現代イスラーム金融まで(長岡慎介)

第II部 所有と市場のパラドクス

第4章 イスラーム市場社会論の新地平——イブン・ハルドゥーン『歴史序説』を再読する(荒井悠太/京都大学)

第5章 非所有経済が都市社会をどのように作るのか?——ワクフの経済社会的役割(五十嵐大介/早稲田大学)

第6章 「低組織化」システムと市場——現代イランから見るもうひとつの発展経路(岩崎葉子/アジア経済研究所)

第III部 市場とモラルの相克とハーモニー

第7章 関係的契約の理論と実証——新興国の組織・都市・貿易に関する比較制度分析の視点から(町北朋洋/京都大学)

第8章 「國家」なきインダス文明社会における市場とモラルの「スケール」について(小茄子川歩/京都大学)

第9章 市場が開示するモラル・コミュニケーション——イスラミック・ツーリズムにおけるコネクティビティ(安田慎/高崎経済大学)

第10章 利己と利他をつなぐイスラーム経済の新実践—再興するワクフ制度のポスト資本主義的可能性(長岡慎介)

イスラームからつなぐ3

翻訳される信頼

野田 仁[編]

さまざまな人びとの関係構築に欠かせず、さらにその背後にある「信頼」関係を裏打ちする翻訳という営為を手がかりに、ムスリムを中心とするコネクティビティの拡大過程を考察する。思想の翻訳、国際商業における通訳の役割、司法における多元主義を切り口として、言語の転換が果たす役割を明らかにする。

【目次】

総 論 さまざまな人びとをつなぐ翻訳の役割(野田仁/東京外国語大学)

第I部 イスラームの知の移動と多言語への翻訳

第1章 完全人間としてのムスリム君主(矢島洋一/奈良女子大学)

第2章 19世紀中国ムスリムの敢然たる翻訳(中西竜也/京都大学)

第3章	東南アジアのムスリム社会における近代性の翻訳(坪井祐司/名桜大学)
第II部	国際商業における翻訳
第4章	ムガル朝の港市スーラトにおける東インド会社と通訳・翻訳(嘉藤慎作/東京外国语大学)
第5章	交易品としてのインド綿布とその「翻訳」(和田郁子/岡山大学)
第6章	ロシア帝国における東方言語の通訳官(濱本真実/大阪公立大学)
第III部	多元的司法における翻訳
第7章	多言語社会の中のオスマン憲法(高松洋一/東京外国语大学)
第8章	遊牧民の慣習法とイスラーム法のあいだ(野田仁)
第9章	インドネシアにおける法の多元性と概念の翻訳(高野さやか/中央大学)

イスラームからつなぐ4

移民・難民のコネクティビティ

黒木英充[編]

現代世界の移民・難民の中でムスリムは大きな割合を占める。移民・難民とそれを受け入れる側の人びとの間に築かれる関係をテーマとし、日本を含め世界各地の事例・経験をもとに、越境する人々の主体性や戦略と、受け入れ側の立場性を重視し、そこにつながる問題があり、どのように信頼が構築されるのかを考える。

【目次】

総論	移民・難民がつくりだす身近でグローバルな越境的世界(黒木英充/東京外国语大学、北海道大学)
第I部	身近なムスリム移民のコネクティビティと信頼
第1章	「グローバルご近所」の可能性——イスラームがつなぐ遠い地域、近い地域(子島進/東洋大学)
第2章	他者を受け入れる——ムスリム移民との信頼構築に対する異文化間心理学の視点(中野祥子/山口大学)
第3章	ムスリム移民の老いと墓——生と死のコネクティビティに関わる課題(岡井宏文/京都産業大学)
第II部	世界をめぐるムスリム移民のコネクティビティと信頼
第4章	タイにおけるパシュトゥン系住民——「仏教国」における少数派の位置取り(村上忠良/大阪大学)
第5章	タール移民第2世代のコネクティビティ——トルコ移住の語りと日本人調査者の立場性(沼田彩誉子/東京外国语大学)
第6章	フランスのムスリム・コミュニティと移民第2世代—新たなアイデンティティの探究(村上一基/東洋大学)
第7章	ムスリムとユダヤ人の間の信頼構築は可能か——ドイツからの問い合わせ(昔農英明/明治大学)
第III部	移民・難民と遠隔地ナショナリズム
第8章	第一次世界大戦期のレバノン・シリア移民——中東地域再編をめぐる信頼の挫折(黒木英充)
第9章	ボスニア移民・難民と国際的ロビー活動——スレブレンツァ事件のジェノサイド認定をめぐって(長有紀枝/立教大学)
第IV部	難民受け入れと支援の歴史と現在
第10章	近代オスマン帝国における難民定住支援——移民村設立にみるコネクティビティと信頼構築(成地草太/明治大学)
第11章	レバノンのシリア難民——世界最高の難民密度国におけるコネクティビティと葛藤(ラーウィア アッタウィール/在ベイルート研究者)

イスラームからつなぐ5

権力とネットワーク

近藤信彰[編]

水平的コネクティビティを発揮して、ネットワークを築き、拡大してきたイスラーム文明。しかし、拡大の過程で、共同体のなかに垂直的な権力関係が生まれ、国家という形態を取るようになった。国家を始めとする権力関係が信頼構築で生まれたネットワークとどうかかわるのか、多様な地域の事例をふまえつつ論じる。

【目次】

総論	権力、コネクティビティ、ネットワーク(近藤信彰/東京外国语大学)
第I部	国家体系とイスラーム共同体
第1章	イスラーム国家体系再論(近藤信彰)
第2章	インド洋における貿易と国家(馬場多聞/立命館大学)
第3章	南アジアの非ムスリム政権とムスリム国家との交渉・交流(太田信宏/東京外国语大学)
第4章	オスマン帝国憲法と近代的カリフ制(藤波伸嘉/津田塾大学)
第II部	オスマン条約体制から近代国家体系へ
第5章	オスマン条約体制と国家体系(堀井 優/同志社大学)
第6章	附庸国をめぐる国際関係(黛 秋津/東京大学)
第7章	「条約の書」から通商条約へ(松井真子/愛知学院大学)
第8章	近代国際法の受容とその影響(沖祐太郎/九州大学)
第III部	帝国とネットワーク
第9章	オスマン帝国のウラマー(秋葉 淳/東京大学)
第10章	ムガル帝国の人的紐帯(真下裕之/神戸大学)
第11章	ロシア帝政末期アストラハンのムスリム社会とカスピ海(長繩宣博/北海道大学、東京外国语大学)

イスラームからつなぐ6

思想と戦略

山根 聰[編]

19世紀以降の近代化の動きに対して、ムスリムは受容、あるいは反発と多様な対応をし、非ムスリムとの関係も揺れ動いた。アラブ、東南アジア、南アジア、日本など世界各地のムスリム・非ムスリム関係の事例を検討しつつ、そこに現れるムスリムの思想と行動の戦略性と信頼構築の実態を明らかにする。

【目次】

総論	ムスリムにおけるイスラーム思想の戦略的可変性(山根 聰/大阪大学)
第I部	戦略としての思想、思想の戦略的展開
第1章	イスラーム再考の思想戦略——近代西洋との対立、「文明の衝突」論の克服を目指して(飯塚正人/東京外国语大学)
第2章	在外シリア人と受け入れ社会のコネクティビティ——意識調査にみるイスラームの可能性(青山弘之/東京外国语大学、アドアルアフマド/東京外国语大学)
第3章	ナフダトゥール・ウラマ(NU)が目指す「寛容なイスラーム」——ナショナリズム闘争史と生存戦略(菅原由美/大阪大学)

第II部	非ムスリムとの関係性を探る	経験から(山本沙希/立教大学)
第4章	ムハンマド・アリー政権によるシリア統治の「戦略」——ムスリム・非ムスリムとの関係構築に向けて(藻谷悠介/大阪大学)	紛争後の権威主義体制の「正統性」と「信頼性」——チエ
第5章	ミャンマーにおけるイスラームをめぐるコネクティビティの形成と解体——1940-60年代のロヒンギャを中心に(池田一人/大阪大学)	チエン住民の視点からの考察(富樫耕介/同志社大学)
第6章	マイノリティのデモクラシー——インド・ムスリムの生存戦略(中溝和弥/京都大学)	異なるイデオロギー間の対話のゆくえ
第7章	信頼とコネクティビティの再構築——インドの宗教間対立におけるムスリムNGOの戦略(マリー ラール/ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン、アヌプリヤ シャルマ/ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)	インドネシアにおけるイスラーム主義武装闘争派・非戦闘員の社会復帰(見市 建/早稲田大学)
第8章	南アジアにおけるムスリムの思想と戦略——共存への模索(山根 聰)	フィリピンにおけるイスラム国(IS)との闘いのゆくえ(石井正子)
第III部	ジェンダーと戦略	
第9章	日本に生きる若いムスリム女性たちのアイデンティティ交渉——ジェンダーとコネクティビティの視点から(工藤正子/立教大学)	
第10章	イスラームにおける男女平等論の展開——「ムサーワー」の思想と戦略(後藤絵美/東京外国語大学)	
第11章	信頼とムスリム女性のモビリティ——現代パキスタンの事例から(ファーイザ ムハンマド ディーン/フンボルト大学)	

イスラームからつなぐ7

紛争地域における信頼のゆくえ

石井正子[編]

紛争地域における信頼・不信、コネクティビティ・分断の諸相に光を当てる。武力紛争では、社会が分断され、人びとのあいだに不信がまん延すると理解されるが、その前提を問う。武力紛争を諸問題の転換過程であると見なし、それを契機に再編される国家、社会、個人の信頼のゆくえを考察する。

【目次】

総 論	紛争地域における信頼・不信の諸相(石井正子/立教大学)
第I部	外部とのつながりと信頼
第1章	シリア内戦およびレバノン内戦における和平努力の比較——外部勢力の関与と信頼醸成(小副川琢/日本大学)
第2章	バングラデシュにおけるロヒンギャ難民の受容と拒絶——信頼と不信の狭間に生きる人びと(日下部尚徳/立教大学)
第3章	移民・難民のバルカンルートについて(佐原徹哉/明治大学)
第II部	ムスリムと非ムスリムのつながりと分断
第4章	南北スーダン間の「軍」関係にみる紛争と平和構築(飛内悠子/盛岡大学)
第5章	「宗教戦争」の条件——中央アフリカ共和国の事例から考える(武内進一/東京外国語大学)
第6章	新疆ウイグル自治区における政府と民衆——信頼あるいは不信の観点から(熊倉 潤/法政大学)
第III部	多元的な信頼、錯綜する猜疑
第7章	紛争下で取り結ぶ人間関係——パレスチナ人と他者(鈴木啓之/東京大学)
第8章	内戦を経て築かれる「つながり」——アルジェリア女性の

第9章	経験から(山本沙希/立教大学)
第IV部	紛争後の権威主義体制の「正統性」と「信頼性」——チエ
第10章	チエン住民の視点からの考察(富樫耕介/同志社大学)
第11章	異なるイデオロギー間の対話のゆくえ
第12章	インドネシアにおけるイスラーム主義武装闘争派・非戦闘員の社会復帰(見市 建/早稲田大学)
第13章	フィリピンにおけるイスラム国(IS)との闘いのゆくえ(石井正子)

イスラームからつなぐ8

デジタル人文学が映し出す名士たち

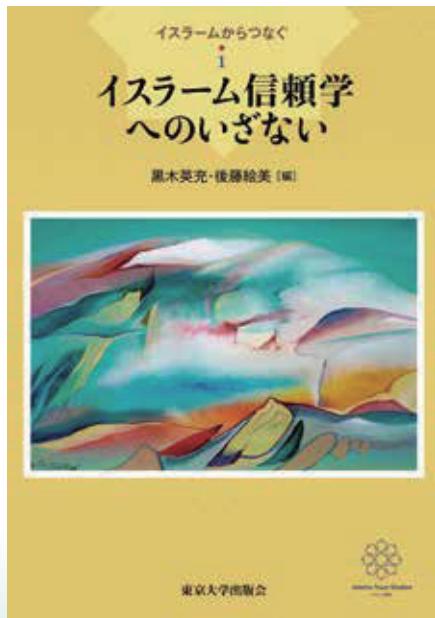
熊倉和歌子[編]

デジタル人文学の手法を用いて、イスラーム世界におけるウラマー、官僚、商人などの名士がどのようなつながりを築き、社会のなかでの役割を果たしてきたかを明らかにする。名士たちの人生やつながりの分析によって、誰が社会を知的・制度的・経済的に支えていたかについて、現代の私たちが考え直す有効性を提示する。

【目次】

総 論	デジタル人文学が拓くつながり研究(熊倉和歌子/東京外国语大学)
第I部	デジタル人文学があぶりだすコネクティビティ
第1章	「普通の」ウラマーを語る意味(新井和広/慶應義塾大学)
第2章	コネクティビティ分析におけるデジタル人文学の可能性(永崎研宣/人文情報学研究所)
第II部	イスラーム世界東部におけるコネクティビティと信頼
第3章	インド洋をまたいだウラマーのコネクティビティ(新井和広)
第4章	中東、インド、東南アジアのウラマーによる法学の継承と現地化(塩崎悠輝/静岡県立大学)
第5章	インドにおけるナクシュティー教団のコネクティビティ(石田友梨/岡山大学)
第III部	地域のなかで築かれるつながり
第6章	近世フェズのザーウィヤを結節点としたコネクティビティ(篠田知暁/東京外国语大学)
第7章	近世地中海沿岸の奴隸社会におけるコネクティビティ分析(アレックス マレト/早稲田大学)
第8章	地理学的思考と文献史学的思考(後藤 寛/横浜市立大学)
第9章	15世紀の中東におけるムスリム商人のコネクティビティ(伊藤隆郎/神戸大学)
第IV部	日常生活のなかの信頼構築と生存戦略
第10章	15世紀エジプト・シリア社会における改宗コプト官僚のコネクティビティ(熊倉和歌子)
第11章	15世紀ウラマーの名目的師弟関係にみる弱い紐帯の強さ(太田(塚田)絵里奈/東京外国语大学)
第12章	日本の中東・イスラーム研究者のコネクティビティを可視化する(須永恵美子/東京大学、熊倉和歌子)





注文書

イスラームからつなぐ [全8巻]

各巻税込

4,180~5,500円 [本体3,800~5,000円+税]

※最寄りの書店へお申し込みください

◆全8巻 申し込みます

ご注文数

セット

1 イスラーム信頼学へのいざない

黒木英充・後藤絵美 [編]

税込4,180円 [本体価格3,800+税]

ISBN 978-4-13-034351-0 2023年3月刊

ご注文数

冊

2 貨幣・所有・市場のモビリティ

長岡慎介 [編]

ISBN 978-4-13-034352-7 2023年10月刊予定

ご注文数

冊

3 翻訳される信頼

野田 仁 [編]

ISBN 978-4-13-034353-4 2023年11月刊予定

ご注文数

冊

4 移民・難民のコネクティビティ

黒木英充 [編]

ISBN 978-4-13-034354-1 2023年12月刊予定

ご注文数

冊

5 権力とネットワーク

近藤信彰 [編]

ISBN 978-4-13-034355-8 2024年9月刊予定

ご注文数

冊

6 思想と戦略

山根 聰 [編]

ISBN 978-4-13-034356-5 2024年10月刊予定

ご注文数

冊

7 紛争地域における信頼のゆくえ

石井正子 [編]

ISBN 978-4-13-034357-2 2024年11月刊予定

ご注文数

冊

8 デジタル人文学が映し出す名士たち

熊倉和歌子 [編]

ISBN 978-4-13-034358-9 2024年12月刊予定

ご注文数

冊

書店名(取次番線)	ご芳名	お電話番号
	ご住所	